

# 銭形平次捕物控

江戸阿呆宮

野村胡堂

青空文庫



江戸開府以来の捕物の名人と言われた銭形平次も、この時ほど腹を立てたことはないと言っております。

滅多に人間を縛らぬ平次が、齒齧みをして口惜くやしがったのですから、よくよくの事だけに相違ありません。

「親分、また神隠しにやられましたぜ」

ガラツ八の八五郎が飛込んで来たのは、初夏の陽が庇ひさしから落ちて、街中に金粉を撒まいたような、静かな夕暮でした。

「今度は誰だ」

平次は瞑想から弾き上げられたように、火の消えた煙管きせるをポンと叩きました。

「石原町いしはらちょうの日傭取ひようとりの娘お仙と駄菓子屋の女房のおまき、それから石原新町しんまちの鑄掛いかけ屋の娘おらく——」

「三人か」

「三人は三人でも、今度のは一粒選りだ。ピカピカ後光の射すのをさらわれて町内の若い者は気違いのようになっていきますぜ。殺生な真似をする野郎じゃありませんか」

「野郎だか怪物えてものだか見当が付かねえから弱っているのさ、とにかく行ってみよう」

平次は短い羽織を引掛けると、ガラツ八の八五郎を案内に、本所へ飛んで行きました。神隠し騒動——と言われたこの事件は、平次捕物のうちでも極めて重要な事件で、詳しく書くと長大な一編の小説になりますが、要点だけをかい摘むつまところでした。

去年の暮頃から、御府内の美しい娘が、一人二人ずつ行方不明になります。

最初のうちはかけおち落はが流行るとばかり思い込み、娘を失った親や、若い女房に逃げられた夫は、内々心当りを捜しておりましたが、何の手掛りもないばかりでなく、不思議なことに、行方不明になるのは女だけで、男の方には一人も間違いがありません。

年を越すと、その傾向はますます激しくなつて、とうとう毎月三人四人と大量の行方知れずがあるようになりました。

若い美しい女ばかり、声も立てず、形も残さず、描いたものを拭き消すように行方知れずになるのですから、江戸中の不安は募るばかり、そのうち誰ともなく——神隠しだと言い始めると、この宿命的な妖神まがつみの悪戯わるさに対して、町人達——わけても美しい娘や女房を

持った人々は、本当に顛え上がってしまいました。

そんな馬鹿な事があるものか——と江戸の御用聞き先は、一斉に奮起しましたが、足跡一つ残さず、コトリと音も立てずに、若くて美しい娘達をさらって行く手際は、全く人間業とは思われません。

こうして銭形の平次が登場するまで、江戸の娘達が三十人も姿を隠したでしょう。

「親分、こいつは諦めものかも知れませんよ。銭形の親分に三月越し塩を舐めさせて、影法師も掴ませねえんだから」

ガラツ八は遠慮のないところをズケズケやります。

「……………」

「神隠しじや平次親分でも齒が立たねえ」

「馬鹿野郎、若い綺麗な娘ばかり隠すような神様があるものか」

「ヘッ」

「人間の仕事だよ、それもとんでもねえ悪党だ」

平次とガラツ八は、そんな事を言いながら、一応石原の利助を訪ね、利助の娘のお品と一緒に、改めてお仙とおまきとおらくの家へ行ってみました。

お仙の父親というのは、定きまった職のない日傭取で、

「お仙の阿魔あまに男なんかあるものか、紅白粉べにおしろいはおろか、油ひとかい一具買ったことのねえ身の上だ——へッ」

打ちひしがれたようになりながらも、貧乏を売物にする日頃の癖をそのまま、こんな事を言っております。

「どうして姿を隠したんだ、詳しく話してくれまいかと平次。」

「詳しいにもザツにも話しようがねえ、久し振りで湯に入りたいて言うから、湯銭だけ持たしてやると、フラリと出かけたつきり、今日で二日二た晩けえも帰らねえ。親分の前だが、そんな長い湯はどこの世界にあるんだ」

この期ごに臨んでも、自棄酒やけざけが手伝うせいもあるでしょうが、捨鉢しやれな洒落を言っております。次の駄菓子屋は留守。——

最後に石原新町の鑄掛屋へ行ってみると、

「錢形の親分さんで。お願いでございます、娘を探し出して下さい。悪者は二階から押し込んで来やがって、娘をさらって行ってしまいましたよ、——男があるだろうっておっし

やるんですか、ジヨ、冗談じゃありません、俺の娘と来た日にや町内でも評判の孝行者で

——

親父はおろおろしながらも、職人らしい威勢のいい事を言っております。

「親分、怪物えてものは隣の天水桶てんすいおけを踏台にして、庇ひさしを渡つて二階へ押し込んだんだね」

とガラツ八、天水桶の埃ほこりの上に印された足跡のようなものや、板庇に残る、破損の跡などを念入りに調べております。

「庇を渡つたのはよく解るが、外から雨戸を開けて入ったのは、どんな手品を使ったんだ」と平次。

「すると——？」

「娘のおらくさんが自分で雨戸を開けて二階から出たんだよ」

「そんな事があるものですか親分、家の娘に限つて——」

鑄掛屋の親父はやつきとなりませんが、平次は一向気にも留めない様子で、家の造り、雨戸の具合などを念入りに見た上、大渋りの親父を説き落して、娘の持物から、貧しい着物まで一通り眼を通しました。

## 二

「八、お前は不思議だとは思わないか」

利助の家へ引揚げると、平次はいきなりこんな事を言い出します。

「何が不思議なんで、親分？」

「今まで誘拐かどわかされた女の身許を十五六軒も当つてみたが、一人も藻搔もがいたのがねえ」

「……………」

「皆んな気を揃えて、素直にさらわれているのはどうしたわけだ。二三十人のうち、一人でもいいから悲鳴をあげたのがあるとか、血を流したのがあると張合があるが、そつと消えてなくなつたんじや、探す方も励みがねえ」

「……………」

「駆落でないことは確かだ、さらわれた娘と、何かと評判のあつた男が皆んな指をくわえて取残されているんだから」

「親分」

不意にお品が口を出しました。一時は錢形平次と張合つた御用聞、石原の利助の一人娘



で、親の利助が身体を痛めてから、残された子分どもを号令して、まだ若くも美しくもある癖に、江戸中の御用聞と肩を並べて、一步も退けを取らぬ娘——だったのです。

「何だえ、お品さん」

「こんな事は、親分はどうに御存じでしょうが」

「いや、存外気が付かずにいるかも知れねえよ」

「さらわれた娘やお神かみさんは、皆んなその日の物に困るような人達ばかりじゃありませんか」

「その通りだよお品さん、金持の娘や女房を狙わないのは、何か仔細のあることだろう。

とにかく、諸人の難儀を黙って見ているわけには行かねえ。乗りかかった船だから、思い切り突っ込んでみようと思うが、お品さん、手を貸して下さいかい」

「それはもう、本所から深川にかけて荒されているんですもの、どんな事でもして悪者を挙げなきやア、父とつさんの顔にもかかわりませぬ。こちらからこそお願い申さなければなりません」

お品は膝に手を置いて、物柔かに平次を振り仰ぎました。少し淋しい細面ですが、水火の中へでもといった気組みが、その切れの長い眼や、キリリと引締った唇にも溢れます。

「こうなれば、最初からやり直した。お品さんは手蹟てが良いから、御苦労でも去年の暮からさらわれた人の名と、年と、町まちどころ所と商売とを調べ上げて、さらわれた日と時刻と、出来れば天気と手口を順々に書いておくんない」

「それくらいのことでしたら、——でも筆蹟ては良くはありませんよ」

「それから八は、吉原なかは言うまでもなく四宿の盛り場を廻って、去年の暮頃から住込んだ、新顔おんなの妓おんなに出来るだけ逢ってみるんだ」

「ヘッ、こいつは悪くねえ仕事だね」

「馬鹿、いちいち役得のつもりでデレデレしていると、限きりがねえぞ、少なく積って三百人や四百人は居るだろう」

「親分は？」

「俺は昼寝をしながら考え事をするよ」

平次はこうして江戸中の岡っ引が思いも寄らなかつた組織的な捜査網を張つたのでした。

それから半月経ったある日江戸の街々の藁いらかの上に泳いだ鯉こいのぼり 幟ぼりが影を潜めると、長い旅に出ていた平次はどこからともなく、神田の家へ帰って来ました。

「今帰けえつたよ」

「あ、お前さん——、お帰かえんなさい」

飛んで出た女房のお静は、片かた襷たすきをかなぐり棄すてるように、縫すがり付つきたいのを我慢しいしい、姉さん冠かんむりりの手拭を取とつて、平次の肩から裾すそへ、旅ほこりの埃ほこりを払はつてやるのでした。

「留守中誰も来きなかつたかい」

「え、どなたもいらつしやいません」

「お品さんと八やちが来るはずだが——」

平次はそう言いながら、井戸端で足を洗あつて、清々した浴衣ゆかたに着換かえていると、八五郎とお品ちんが伴たれ立たつてやつて来きました。

「親分、お帰かえんなさい——、半月昼寝ひげんをしていたにしちや、陽やに焦やけたね」

「つまらねえ事を覚えていやがる、ところで早速だが、頼たのんだ事はどうした」

平次はお品ちんに座蒲団ざぶとんを勧めながら、明るい初夏はばかの光を浴あびて、何なにの憚はばかる様子ようすもなくこう八五郎に話はなしかけるのでした。

「それが驚いたよ、親分、江戸の盛り場というものは、思いの外大したものだね」

「当り前だ」

「おんな  
妓の数もあんなにあらうとは思ひも寄らなかつた。毎日毎日、白粉臭いのを首実検してつくづく厭いやになりましたよ、おしまひには嘔むかつ氣きいて来る」

「とんだ役得だ、——とところで、さらわれた女に一人でも出つくわしたか」

平次は冗談を言いながら膝を進めます。

「一人も居ねえ、——身を沈めた理由わけを聞くと、どれもこれも氣を揃えて親のためだ。何だつて江戸の盛り場にはあんなに親孝行が多いんだらう」

「馬鹿野郎」

「吉原なかから始まつて、千住せんじゆ、新宿、品川、板橋、の四宿を始め、大根畑から金猫銀猫、いろは茶屋といった岡場所、比丘尼びくにから夜鷹よたかまで、八丁堀の旦那の御声掛りで、町役人立会の上しらみつぶ 虱しらみつぶ 潰つぶ しに見て廻つたが、暮から先月へかけて、本所深川でさらわれた娘などは一人も居ねえ」

ガラツ八は調子に乗つて、少し仕方しかたばなし 嘯なになりました。

「御苦勞御苦勞、大方そんな事だらうとは思つたが、一度當つてみないうちは安心がなら

ねえ、——とところでお品さん」

「親分、家の若い者に手伝わせて、こんなものを拵こしらえてみましたが、役に立つでしょうか」

お品は風呂敷を解くと、半紙横綴よこつづり十枚ばかりのを出して、極り悪そうに平次の前に押やります。

「これは大変だ、——口で言うとは何も無いが、十何ヶ町を歩いて、これだけ書き上げるのは容易でない」

平次はバラバラとくりひろげて、ザツと眼を通しましたが、何に驚いたか、重ねて、

「お品さん、不思議なことがあるが、気が付きなすったか」

こう言いながら、膝の上の帳面を叩きます。

「施行せぎようのことでしょう」

お品の賢い眼はまたたきます。

「それだよ、お品さん、人さらいのあつた町は、みんな本銀町ほんしろがねちようの巴屋三右衛門ともえやさんえもんが、施米せまいをした町ばかりだ」

平次は大変なことに気が付きました。

巴屋というのはその頃、越後屋えちごやと対抗した江戸一流の呉服屋で、呉服の外に、大伝おおでんまち

馬町、金吹町などに唐物屋、米屋、金物屋などの店を持ち、今の百貨店を幾つにも割ったような豪勢な商売をしている店でした。

主人の三右衛門は、やがて五十にも近い年配ですが、商売熱心な上に、世にも有難い心掛けの男で年中善根を施すのを楽しみにしている人間だったのです。

もつとも、長者番付の三役所で、金に不自由のないせいもあつたでしょう。諸方の寄付寄進はもとより、付合の費用にも糸目をつけず、その上昨年夏頃から、浅草、本所、深川を中心に、毎月八の日を決めて、一ヶ月一ヶ月の施米をはじめ、町役人の肝煎で、その町内の者でさえあれば、一人三升ずつの米を施していたのです。

施米を貰う資格は、女か子供と限られました。いかに世並みが悪いといっても、凶作飢饉というでもないのですから、大の男が笹や風呂敷を持って三升の米を貰う行列に加わるわけにもいかず、女子供に限ったのは、まことに当然の制限でもあつたのでした。

「親分、その上、人さらいは、施米のあつた町を順々に荒していますよ」

お品は註を入れました。

「なるほど、これは面白い。去年の九月が長崎町、十月が松倉町、十一月は中ノ郷、十一月は飛んで森下、それから海辺大工町、それから浅草へ行つて——これは驚いた、人さら

いは執念深く施米の後を追っかけて歩いてる」

「親分、そりやどいう判じ文はんもんだろう？」

ガラツ八の鼻はキナ臭く蠢うごめきます。

「巴屋は万両分限の筆頭だ、まさか貧乏人の娘をさらって売るはずはねえ」  
 銭形の平次にも、これ以上のことは解りません。

#### 四

「親分、どこで昼寝をしてなすったんで」

ガラツ八は改めて訊きました。

「ハツハツハツ、よつぽど俺の昼寝が癩しやくにさわったとみえるな、——安心するがよい、奥州街道、中仙道、甲州街道の手近な宿々を捜し廻った上、東海道はわざわざ箱根まで行ってみたが、この半年の間に関所破りもなく、怪しい女も通らねえ。それから、別に人やつて品川と三崎と伊豆の船番所も当つたが、女を乗せた船なんか一隻も通らねえとよ」

「へエ——」

昼寝どころの沙汰ではありません。たった十五日間に平次がどれだけ骨を折ったか、ガラツ八は今さら唸るばかりです。

「三十人の女は、江戸の盛り場にも売られず、上方へ送られた様子もねえとなると、どうしても江戸に居なきやアならないはずだ、——もつとも、生きているか、死んでいるか、そこまでは解らないが——」

「親分」

お品はさすがに怯えました。

「三十人の若い女だ。生きていれば泣きも笑いもするだろう、殺されたにしても、死体のやり場があるめえ」

平次の言うのは尤もでした。江戸の真ん中で、三十の死体を、人目に触れないように処分する方法はありません。

「どうすりやアいいんだろう、親分」とガラツ八。

「たった一つ工夫がある、——が、これはむつかしい、命がけの仕事だ」平次は何やら思い惑う様子です。



「親分、命がけの仕事なんざ、お茶漬ほどにも考えちやいないこちとらじゃありませんか。八、これをこうしろ——と威勢よくやつておくんなさい」

ガラツ八の八五郎は、はみ出した膝小僧を擦りながら、上眼使いに平次の打ち沈んだ顔を睨め上げるのでした。

「手前で間に合や、命惜しみなんぞするものか。ただ、こいつはいけねえ、女の子でなきやア役に立たない仕事なんだ」

口ではこんな荒つばい事を言いながらも、平次の霑んだ眼は、ガラツ八の純情を感謝しております。

「役に立つかどうか解りませんが、私ならどうでしょう」

お品は度ましく口を容れました。

「お品さん、それはいけねえ、そんな事をして貰つちや石原の兄哥あにきに済まねえ」

平次は頑固かたくくなに頭を振りました。

「でも親分、本所深川の人さらいを、この上放っておいては、父親の名折れになります」

お品の決心にも拠りどころがありません。親父の利助に代って、十手捕縄を辱しめないためには、生命いのちを的の仕事に飛込むのも已むを得ないことだったのです。

「なるほど、そう言えばその通りだが、こればかりはいけねえ」

「どんな事をやらかしゃいいんで？ 親分」

ガラツ八はまた横合から口を入れます。

「明日は八日で巴屋の施米日だ。今度は徳右衛門町とくえもんちやうと菊川町きくがわちやうの二ヶ町の人数を南辻橋の橋詰の空地に集めると言うから、綺麗な娘を一人土地の者に仕立て、策やぐるか何か持たせて、施米を貰いにやろうという寸法だ、——だが、この囷おとりは、若くて綺麗でなくちや勤まらない」

「それじゃ、私では勤まりそうもありません」

お品は、——若くて綺麗でなくちや——と聞いて、淋しく笑って紛らせてしまいました。出戻りには相違ありませんが、白粉おしろいけ気さえ嫌ったお品は、美しくなければならぬ囷おとりなどを買って出るような、嗜たしなみのない女ではなかつたのです。

「冗談でしょう、お品さんほどの新造しんぞは、本所深川に五人とはねえ」とガラツ八。

「馬鹿野郎、何て口を利きやがる」

「へエ」

平次にたしなめられて、一ぺんで凹へこんでしまいました。

## 五

南辻橋の空地、粗末な葭よし簾張すざはりの小屋に、青竹の手摺をぐるりと繞めぐらしたところへ、界隈いわいの女子供は目の詰んだ箆せざるや、風呂敷持参で朝のうちから詰めかけて来ました。

世話人は巴屋の番頭手代に、町内の鳶とび頭がしら、臨時にかり集めた人足など、土間に積んだ二三十俵の白米を一俵ずつほぐすと、順々に入つて来る女子供へ、杵ますで量つて威勢よく頒わけてやつております。

一人三升、少々ぐらいの暮しの家は、無理をしても家族交代で出て来る仕組になつておりました。町役人は人別帳を控えて、かねて家主から渡しておいた短冊形の切手と引換えですから、手数な代り誤魔化ごまかしも間違あやいも起りません。

巳刻よつ(十時)を少し廻ると、主人の巴屋三右衛門は番頭と鳶頭あしを従えて、見廻りにやつて来ました。五十少し前といった、デツプリした恰かつぶく幅で、柔らかな肩、少し鋭い智恵の輝きを思わせる眼、二重顎あご、大町人らしい寛闊かんかつなうちにも、何となく商機さとしに敏い人柄を思

わせるのが、地味な紬つむぎを着て、ニコニコ遜へりくだった微笑を湛たえながら、そつと小屋の横から、施米の忙しさや、手摺の外の群衆などを満ち足りた様子で眺めているのでした。

「あれが巴屋の旦那だよ」

「へエ——、道理で福相だ、大したものだね」

三升だけのお世辞を言いながら、小腰を屈めて遠くから挨拶をする者などがあります。

「旦那、銭形の平次親分が来ていますよ」

「何？ 銭形？」

「あれ、向うから施米の行列を見ているのは、平次親分と子分の八五郎でございますよ」

番頭に注意されると、巴屋三右衛門は黙うなずって點頭うなずいて、二人を従えたまま平次の方へ近づきました。

「これは銭形の親分、御苦労様で」

「巴屋の旦那でしたか、結構な善根ですね、皆さんどんなに喜んでいらっしゃいますよ」

「いやそう言われると極りが悪い、ほんの少しばかり、私の気紛れですよ」

「毎月の事ですから、気紛れや道楽では続きやしません、恐れ入りました」

「いやもう」

三右衛門は本当に恥かしそうに顔を赤らめましたが、心の中では、銭形平次に褒められたのを、どんなに喜んだかわかりません。

「ところが巴屋の旦那、世の中には良いことばかりはないもので、こんな結構なことのあ  
る本所深川に、近頃若い女の誘拐かどわかしが流行はやるのには困ったものじゃありませんか」

平次は妙なことを言い出しました。

「そんな噂うわさも聞きましたよ、困った事で——」

三右衛門の柔和な顔が少し顰ひそみました。

「それに、不思議なことに、人さらいのあつた町は、施米のあつた町ばかりで」

「えッ」

「施米の順で人さらいをやるのは妙じゃありませんか」

何を考えたか、平次は思い切つてズバズバ物を言います。

「それは初耳でしたよ、なるほど、そんな事もありましたかね」

巴屋の主人もさすがに驚いた様子です。

「何か心当りはありませんか」

「心当りは少しもありませんが、どうかしたら、私の施米にケチを付けようという企みじ

やありませんか」

「……………」

「商売気離れた施米で、もとよりお客様の御心持、人気などを考えたわけじゃありませんが、これをやり始めてから不思議に商売の方が良くなつて行きます」

「そんな事もあるでしょうね」

「手前どもの商売がよくなると一方には悪くなる方もあるわけでしょう、ツイ人間の浅ましきで、私を怨む者も出来るわけで——」

「巴屋はこうスラスラと言いましたが、平次の探るような眼を見ると、ピタリと口を噤んでしまいました。」

「旦那、お店を怨む者にお心当りはありませんか」

平次は一歩進めました。

「さア、それは。別に心当りと申すほどの事はありませんが——」

三右衛門は、大店の主人らしく、鷹揚に笑つてそっぽを向きます。

その時、平次の眼は、施米の行列の先頭、ちようど小脇に抱えた筈へ、三升の白米を入れて貰っている二十一二の女の眼と逢いました。

「あ」

平次は危うく声を立てるところでした。

若い人妻らしいその女の美しさが、四方の汚いののに反映して、あたりにも輝かしいばかりでなく、その身みなり扮がまた、顔形とは似も付かぬ凄まじい汚さだったので。

肩も膝も抜けた素すあわせ裕、よれよれの帯を締めて、素足に冷飯草履、埃ほこりだらけな髪を引詰めて疣いぼじりまき尻卷にし、白粉の気が微塵みじんもないのに、沢つやの良い玉のような顔の色は、どう見てもその日の物に困る人間ではありません。

その女が米を貰って、イソイソと逃げるように立ち走ると、少し離れて南辻橋たもとの袂たもとに立っていた、頬きずあとに古い傷痕のある遊び人風の男が、どこやらと合図を交しているのが、物に馴れた平次の眼には、実によく判るのです。

「巴屋の旦那、——私がこうして、施米を見張っているわけはお判りでしょうね。この上、人さらいなどがあると、これほどの善根も沙汰さた止みにならないとも限りません。そうなる」と第一貧乏人が可哀相じゃありませんか」

平次は妙な事を言い出します。

「有難うございます。親分が見張って下さるんで、どんなに心強いかわかりません、——

でも、世間では、人さらいは人間業ではない、あれは神隠しだ——と言っているそうですが」

「そんな馬鹿なことがあるのですか、人間も人間、容易ならぬ人間ですよ、——だが旦那、私も銭形とか何とか言われて、少しは悪者に烟たがられた男です。女の子をさらうよ  
うな、卑怯な野郎に負けようとは思ひも寄らない、私が見張っているうちは、指も差させるこつちやありませんよ」

平次は日頃にもない大言壮語を吐き散らします。驚いたのは側に居たガラツ八、——いやそれより驚いたのは巴屋の三右衛門でした。

「親分、それは本当で」

「私は自慢は大嫌いですよ」  
あつし

「へエ——」

これでは挨拶のしようがありません。

## 六



「親分、またやられたッ」

ガラツ八が飛込んで来ました。南辻橋の施米があつてから三日目です。

「菊川町の盲目の太助の出戻り娘だろう」

「親分は、どうしてそれをッ」

「大変な事になった、来いッ、八」

平次は脇差をブチ込むと、サツと飛出しました。続くガラツ八、女房のお静は呆氣あつけに取られてその後ろ姿を見送っております。

「親分、何をそんなにあわてなさるんで」

菊川町の裏、盲目の太助の汚い家の前に着いた時ガラツ八はたまり兼ねて平次の袂を引きました。

「黙っている、今に判る」

平次は好奇心でハチ切れそうになっているガラツ八を払い退けて、太助の家へヌツと入ります。

「お品さんが見えなくなつたそうじゃないか、どうしたんだ」

「銭形の親分さんで——今神田のお宅へお知らせしようと思つていたところですよ」

太助は見えぬ眼を見開いて、さして驚く風もなく、このちんにゆうしや闖入者を迎えます。

「親分、お品さんはどうしたんです」

ガラツ八はたまり兼ねて後ろから首を突込みました。

「俺があんなに止めたのに、この家の娘の身代りになってさらわれたんだ。——綺麗自慢と思われたくないから、一度は思い止まったような事を言っていたが、お品さんは気性者だから、あんな事で引込む人じゃねえ」

「へエ——」

「施米の時、姿を変えて来たのを、お前は気が付かなかつたらう。身みなり扮を落すと、あの人は後光が射すほど綺麗だったよ」

「へエ——」

「俺は巴屋の旦那に言うような顔をして、その辺に様子を見ていた悪者へお品さんをさらつたら承知しねえ——ということ呑込ませるつもりで、つまらない自慢を言ったが、あれがかえって悪かつたんだ。悪者は俺の鼻を明かすつもりでお品さんをさらつたんだ」

平次は今さら口く惜やしがりますが、どうすることも出来ません。

いろいろ盲目の太助から聞くと、お品は施米の前の晩そつと太助を訪ね、わけを話して

太助の娘——出戻りながら美しいという評判の娘——になりすまし、真物の娘は石原の家へ預けて、翌る日、施米を貰いに出掛けて行ったのでした。

お品は賢い女には相違ありませんが、女の本能が教えてくれる「自分の美しさ」だけはつきり知っていたのです。

それから三日、お品は実によく化けおおせました。平次はお品の留守にそつとやって来て、太助の様子を訊き、いろいろ打合せしましたが、せつかく決心をして、貧しい生活に我慢しているお品の計画を破るわけにも行かず、危ぶみながらも成行きを見ていたのでした。

「お品さんは、昨夜までは確かにここに居ました。私は俄盲目で感が悪いが、これは間違いありません。今朝起きてみると、どこへ行ったかいつもの声も足音も聞えず、手探りで捜してみると、雨戸が一枚明けっ放しになっておりました」

太助の話はこんな事で、一向取止めありませんが、お品の行方知れずになったのは、夜中過ぎ、どうかしたら暁方ではあるまいかと思われたのでした。

平次とガラツ八は、一応太助の家の内外を見せて貰いましたが、何の手掛りもありません。路地には足跡一つあるわけがなく、雨戸は間違いもなく中から開けたもので、強いて

言えば、今までさらわれた女達のように、あの賢いお品も、フラフラと戸を開けて、怪しの物に操られるように、フラフラと出て行ったという外には、見当も付けようがありません。

「帰ろうか」

二人は徳右衛門町の河岸の端を一つ目橋の方へ辿りました。

「おや、何でしょう、親分」

ガラツ八は立止つて橋の欄干を指しております。

「ウーム」

平次も唸りました。橋の欄干の手前寄りに消炭でかなり大きく、錢の形が一つ描いてあるのです。

「お静さんが花嫁に化けた時やった術だ、——これは間違ひもなくお品さんですぜ」  
ガラツ八は心得顔に一つ目の橋を渡つて両国の方へ早走りになります。

両国橋の本所寄りの方にも、これは直徑五寸もあるうと思われる大錢形が一つ。もう疑いも何にもないような気になって、ひた走りに広小路へ、——ここへ来ると、さすがに躊躇います。

巴屋の店の方へ行く順路は、柳橋を右に見て、横山町を真つ直ぐに大伝馬町から本町へ出るのですが、その辺の横町、路地、大通りには、銭形の葉などは一つもありません。念のため、引返して薬研堀へ行くと、元柳橋の欄干に一つ、これは小さいが橋が新しいのでくつきり目に付きます。

「あつたあつた」

ガラツ八は鬼の首でも取つたように飛び上がります。

そこから湊橋まで、辿り着くのに小半刻かかりましたが、結局、銭形葉を辿つて、南新堀の廻船間屋浪花屋の前に立つていたのでした。

そこには、表に積んだ天水桶に、消炭ながら黒々と銭形が一つ描いてあつたのです。

## 七

浪花屋へ入つて、主人に逢いたいが——と丁寧に言うと小僧はおよそ腑に落ちない顔を  
して、

「先刻、三輪の万七親分が来て誘拐の疑いがあるとかおっしゃって、旦那に縄を打つて伴

れて行きましたよ、——番頭さんも三人縛られましたが、どんな御用でしょう」

そんな事を言っております。

「あッ」

驚いたのはガラツ八でした。せつかく手繰つて来ると、三輪の万七に挙げられたんでは、まるつきり形無しです。

「たいそう早く手が廻つたな、——もつとも俺はこの主人を縛るつもりで来たのじゃない、——三輪の兄あにき哥が縛つたのは何かの間違いだろう。お内儀かみさんに、あまり心配しないようにって言うんだよ」

平次はそう言いながら外へ出ました。別に負け惜しみを言っている様子もないのが、ガラツ八には不思議でたまりませんでした。

「親分、浪花屋でなきやア、誰がお品さんをさらつたんでしよう」

「そんな事が判るものか」

「消炭けしずみで描いた錢形は？」

「偽物だよ、よく見るがいい、書いてある場所が詭あつらいむ向むきすぎるし、第一、悪者にさらわれて行く女が、あんな手際の良いものを書けるわけはねえ」

「へエ」

「念入りに円まるを描いて、中へ丁寧な角かくを入れてあるぜ。浪花屋の天水桶のなんか、男でなきやア、描けない高さだ」

「なア——る」

「その上、浪花屋の前を通り越して、靈岸橋れいがんはしの袂へ消炭の片かけらを捨てて行ったのは、どうだ。お品さんは浪花屋の天水桶へ目印の葉しおりを書いて、ここへ入りましたと教えておきながら、靈岸橋を渡つて鎧よろいの渡の方へ行つたことになるぜ」

「親分、恐れ入った」

ガラツ八はこの素晴らしい親分の前に、心からなるお辞儀を一つ、ピョコリとやつたものです。

「馬鹿野郎、往来で人の尻へお辞儀なんかしやがって、人様が見て笑ってるじゃないか」  
「ところで親分、これからどうしたものでしょう」

「俺にも見当が付かない」

二人は間もなく鎧の渡に立つておりました。

「向うへ渡るんですか」

と船頭。

「向うへ渡つてもいいが、今朝イの一番にここを渡つたのはどんな人間だい」

平次はさり気ない調子で訊ねます。

「朝河岸へ行く肴屋さかなやでしたよ」

「それから」

「青物市場へ行く人と、茅場町かやばちようの薬師様へのお詣りの人と、それから——」

「巴屋の番頭か手代は渡らなかつたかい」

「知りませんね」

平次の身分をさと覚つたものか、面倒臭い問にも思いの外丁寧ていねいに答えてくれます。

「頬に傷のある遊び人風の男は？」

「そんな人は渡りませんよ」

平次はフト、南辻橋の施米の時、橋の袂で何やら合図をしていた男の事を思い出したのです。あの時はお品の変装に気を取られて、惜しい生き証拠を逃がしましたが、お品をさらつた時一と役勤めたくらいですから、昨夜の一件にも、関係してはいないはずはないと思ひ当つたのです。



「遊び人風の男は存じませんが、頬に傷のある堅気の男なら通りましたよ」

「えッ、それは誰で、どこへ行つた」

ガラツ八がたまり兼ねて口を出します。

「あれは親分方の探しなさるような男じゃありません。本銀町ほんしろがねちようでも名うての堅い人間で、あんまり堅いんで、融通がきかないというものか、塀隣の巴屋さんと年中喧嘩けんかしている男ですよ」

「誰だい、その男は」

「桶屋の甚三郎じんざぶろうと言や、日本橋で知らない者のない因業いんごうな片意地な人間ですぜ」

「あれが桶甚おけじんか」

平次も驚きました。あの南辻橋の袂に居た遊び人風の男と、若いくせに、頑固一徹で通っている桶甚と、同じ人間とはどうしても思えませんが、船頭に言われてみると、なるほど思い当る事がないではありません。

「桶甚と巴屋はそんなに仲が悪いのか」

平次は重ねて訊ねました。

「悪いの悪くないのつて、何しろ一方はあの通り片意地で、桶屋といつても、早桶ばかり

拵こしらえてる人間でしょう。巴屋さんの方はあの通り派手で、金持で、施いしが好きで、江戸中に人気のある人だから、土台そり反そりが合あいません。塀隣へいりんのくせに、年中唾いがみ合あいの喧嘩けんかでさ、もつとも巴屋さんが金に飽あかして桶おけ甚しの家屋敷けあやしきを買かおうとしても、旋毛つむじを曲まげて動うかないのが喧嘩けんかの因もとなんだそうで——」

平次は老船頭の饒おしやべり舌しほをいい加減いかにげんに聞いて、船から飛降りると、一散いちさんに本銀町へ駆けかて行いきました。

## 八

本銀町の一角、一町四方もあろうと思う巴屋の店の後ろに、もう一町四方ほどの高い塀へいをめぐらして、巴屋の豪勢ごうせいな住居すまいがあります。その高い塀の下に、押し潰つぶされそうになりながら、頑張がんばっている早桶屋——巴屋が金に飽あかして地所ぢしよごと買かい取とろうとするのを、頑がん固こにハネ飛とばして、三方塀さんぱうへいに囲かこまれながら、ダニのように喰くい下くだがっているのが、名代の片意地へんいぢ者しや甚し三郎ざうだったのです。

平次とガラツ八が、桶屋の店先に立つと、

「そこに立つちや暗いよ」

大肌脱いで桶の仕上げをしながら、上眼使いにジロリと見たのが、例の名物男の甚三郎です。

年の頃は四十前後、左の頬にかなり古い傷痕はありますが、これが南辻橋の袂に立っていた、小意気な遊び人とはどうしても思えません。

「親方、精が出るね」

「早桶の注文かい」

どうも少し食い付きよくありません。

「お前さん昨夜どこへ行きなすつたえ」

「何？」

「お品さんをどこへ隠したんだ、それを教えて貰おうか、次第によつちやお前を入れる早桶を注文するよ」

「何だと、手前は一体誰だ」

「神田の平次だよ」

「あッ、銭形の親分」

甚三郎は急に肌を入れると、一つピヨイとお辞儀をしました。

「施米の時からお品さんをつけ廻していたようだが、昨夜どこへ伴れ込んだんだ」

平次は手厳しく、――が、事務的に言葉を進めました。

「何をおっしゃるんで、親分」

「白ばつくれちやいけねえ、菊川町から、念入りに橋々へ錢形を書いたのは御苦労だった  
ネ」

「私には何が何やら少しも解りませんよ」

桶甚是持前の片意地を發揮して少しムツとした様子です。

「その手を見せろ」

あつと言う隙もありません。平次はいきなり飛付くと、桶甚の右の手をグイと握りました。掌には何の異常もありません。

「手がどうかしましたか」

「見ろ、手は洗ったが、爪の間を掃除するのを忘れたろう。消炭がこんなに付いてるじゃないか、太い野郎だ」

「あつ」

飛退くと甚三郎の手には、キラリと鑿のみひらめが閃きました。早くも飛付いた八五郎、後ろから、鑿を持つ手ごと、一流の剛力で羽交はがいじ締めにしてしまいました。

「神妙にせえ」

必死と騒ぐ甚三郎は、二人の手で高手たかてこて小手に縛り上げられてしまいました。

雇人は逃げ散り、女子供は、顫え上がっている。もう二人を妨げる者もありません。「八、その野郎を逃がすな、俺は家の中を捜してみる」

平次は一と間一と間、恐ろしく念入りに調べ始めました。店にも、居間にも、お勝手にも何の変ったところありません。が、風呂場へ入って、その中へ据えてあるくせに、一向使ったようにもない商売物の真新しい風呂桶を見ると、何の気もなく、それを動かしてみなくなつたのです。

ガラツ八を呼んで、二人がかりで少し退のかせると、下から現れたのは、少し土を冠った千両箱が三つ。

「あッ」

平次は予期した事ですが、ガラツ八が仰天してしまいました。

「まだ面白いものがある。来い、八」

風呂場の裏の炭部屋に入ると、平次はいきなり羽目板に手をかけて、存分に押ししてみま  
した。

「あッ」

もう一度驚くガラツ八の前へ、三つ目の板がスツ——と開いて、明るい庭の景色が映つ  
たのです。

「ちようど隣の巴屋の塀の下だから、抜け道はこの辺だろうと思ったよ、八、驚かずに伴  
いて来い、その縄付きを逃がしちやならねえよ」

「へエ——」

こうなると、平次の御意ぎよいのままです。ガラツ八は桶甚を追つ立てるように、パアツと明  
るい庭へ出ました。

## 九

江戸阿呆宮あほうきゆう——読者はこんな言葉をお聞きになったことがあるでしょうか。

平次とガラツ八が入って行ったのは、世にも不思議な歓楽境で、巴屋三右衛門が一代の

智恵を絞つて建てた、地上の女護島にょごがしまだったのです。

その設備の怪奇さ、中に養われている美女の夥おびただしき、さすがの平次とガラツ八も度胆を抜かれてしばらくは口もきけない有様でした。

母屋おもやの外ほかに土蔵七棟むね、それを繋つなぐ廊下、泉石せんせきの奇を尽し、さして広くはありませんが、善美を尽した豪勢な構えは、見ぬ世の龍宮と言つてもこれほどではなかったでしょう。

オランダの敷物、ペルシャの壁飾り、インドの窓掛、ギヤマンの窓、紫檀したん黒檀こくたんに玉ぎよくを彫ちりばめた調度、見る物一つとして珍奇でないものはありません。

巴屋三右衛門はここに貧民の中から盗んだ美女を集め、淫蕩無比いんとうむひの歓楽境を作つて、慈悲善根に余念のない大町人の仮面を冠り、世にも憎むべき二重生活を営んでいたのでした。三右衛門の意に従わない者は、虫のように押し殺されて、早桶屋の甚三郎の手で、極めて自然に処分されてしまいました。

残るのは、栄華に眼がくれて、この阿呆宮を地上の樂園とも思い込んでいる者ばかり。これほどの騒ぎの中に、開いてやった土蔵の扉とからたった一人も逃げ出そうとする者のないのには、さすがの平次も腹の底から驚いてしまいました。いや、この罪悪の淵ふちから脱け出そうとする良心を持ったのは、とうの昔に殺されていることに気が付かなかつたので

す。

「さアさア皆んな親許へ引渡してやる、外へ出る」

平次は七つの土蔵をめぐつて、豪奢ごうしゃを極めた部屋部屋へ触れて歩きましたが、三十余人の女どもは振り向いてみようともしません。

「親分、桶甚が逃げましたぜ」

「何？」

いつの間にやら二人は、土蔵の奥の一室に閉じ込められて恐ろしく巖がんじょう丈ぢょうな大扉おびどが背後しろとびに鎖とぎされているのが付きました。

「どれどれ生け捕ったか、——それはよかつた」

格子の前には、三右衛門と甚三郎、こつちを指してニヤリニヤリと笑っております。

「焼くわけにも行くまい、硫黄いふで煉いぶして、少しイキの悪くなったところを、手前ものの早桶にでも入れて泉水に沈めましょう」

甚三郎は途方もないことを言います。

「錢形の親分、とんだ災難だったね、こんな所へ入るのが土台間違いの種さ。女どもはここを極楽のように思っているんだから、親分のすることは、全く余計なお節介と言うもの



だよ、ハツハツハツ」

存分に着飾った女どもの中に立つて、巴屋三右衛門相好そうごうを崩して笑っております。

「畜生、どうするかみやがれ」

齒を剥くむガラツ八。

「……………」

平次は黙って二人を見詰めました。

「どうだい銭形の、巴屋さんと仲の悪い俺がその実無二の仲間と気が付いたところまでは上出来だったが、多勢の綺麗首に見とれて、俺を逃がしたのが、その丸タン棒野郎の落度とは言うものの、やはりお前の不運さ。鼠ねずみのように硫黄で燻してやるから、せいぜい苦しむがよからう」

甚三郎はそんな事を言いながら、女どもの持つて来た大火鉢に一と握りの硫黄を投り込み、扇を持出して、ハタハタと格子の中へ、その凄まじい毒煙あおを煽ぎ入れるのでした。

\*

「こんな憎い奴はなかった」——と平次ほどの者が言つたくらいで、施米などをやって、江戸の人氣を一身に集め、商売の金儲けにそれを利用した上、歡樂と豪華な生活を餌えさに貧しい女を虐しいたげたのは、いかにも許し難いことだったのです。

浪花屋を陥れたのは商売上の怨みで、三右衛門の密告状に驚いて、あわてて無辜むこを縛つた三輪の万七の器量の悪さは言うまでもありません。

一番大事なことを言い落しましたが、平次とガラツ八を助けたのは、やはりお品だったのです。その時まで、死んだ者のようになっていたお品は、二人が硫黄燻しにされるのを見るとそつと甚三郎の家への通路を抜け出して、八丁堀へ飛んで行き、危ないところで平次とガラツ八を救うことが出来たのでした。

「お品さんの笈あしを持った恰好はなかったぜ、綺麗な人はボロを着るとますます綺麗になるから不思議さ」

ガラツ八がそう言つてお品をからかったのは、ズツと後の事です。





# 青空文庫情報

底本：「銭形平次捕物控（五）金の鯉」嶋中文庫、嶋中書店

2004（平成16）年9月20日第1刷発行

底本の親本：「銭形平次捕物百話 第四巻」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1934（昭和9）年6月号

※副題は底本では、「江戸一阿呆宮《あほうきゆう》」となっています。

入力：山口瑠美

校正：noriko saito

2017年10月25日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 銭形平次捕物控

江戸阿呆宮

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>